

# 総合情報基盤センター外部評価報告

## はじめに

総合情報基盤センターでは、改組前の学術情報処理センター時代より、毎年の自己点検評価に加えて、概ね4年ごとに外部評価を実施することとしている。平成18年度は外部評価の年度にあたり、平成19年1月31日及び2月8日の二度に分けて、外部評価を実施した。

平成18年度の外部評価委員は、以下の方々に依頼した(50音順)。

- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 浅川達夫  | 株式会社佐賀IDC 代表取締役社長 |
| 宇佐川毅  | 熊本大学総合情報基盤センター長   |
| 宇津宮孝一 | 大分大学総合情報処理センター長   |
| 山井成良  | 岡山大学総合情報基盤センター教授  |
| 吉村賢治  | 福岡大学総合情報処理センター長   |

外部評価委員会では、総合情報基盤センターの概要の説明に続いて、質疑応答が行われ、その後に見学、再度質疑応答が行われた。

## 外部評価委員会概要

日時	平成19年1月31日(水)15時30分～17時30分
場所	附属図書館会議室
出席者	外部評価委員 浅川 達 夫 株式会社佐賀 IDC 代表取締役社長 宇佐川 毅 熊本大学総合情報基盤センター長 宇津宮 孝 一 大分大学総合情報処理センター長 山 井 成 良 岡山大学総合情報基盤センター教授 佐賀大学 只木総合情報基盤センター長，渡邊総合情報基盤センター副センター長，竹生総合情報基盤センター副センター長，森田文化教育学部教授，木戸田経済学部教授，後藤医学部教授，高崎医学部附属病院助教授，日永田助教授，大谷講師，原総務部長，中道学務部長，木塚学術研究協力部長
陪席者	上村総務課長，宮崎情報企画室長，松尾情報システム係長，瓜生情報図書館課長，浅岡利用サービス系(電子情報)係長，小野技術専門職員，江口技術専門職員，山田情報管理係長

- 1 開会挨拶(只木総合情報基盤センター長)
- 2 佐賀大学総合情報基盤センター概況報告(竹生総合情報基盤センター副センター長)
- 3 質疑応答
  - 3.1 センターの多数のミッションに対する大学の経済的支援
  - 3.2 事務とセンターとの連携
  - 3.3 「研究高度化支援」の内容
  - 3.4 SINET 接続の将来的考え方
  - 3.5 大規模障害発生の状況
  - 3.6 任期制
  - 3.7 教員の個人評価及び評価項目
  - 3.8 技術職員の交流及び個人評価
  - 3.9 情報関連技術のスキルアップ
  - 3.10 部局システム導入時の対応
- 4 施設見学
- 5 外部評価委員講評
  - 5.1 前回外部評価時の指摘事項への対応
  - 5.2 リスク管理の重要性
  - 5.3 センター業務増加に対応した大学法人としての支援
  - 5.4 センター業務への大学法人としての理解と評価の重要性
  - 5.5 センターが提供する「箱」としてのシステムとコンテンツとの連携の重要性
- 6 閉会挨拶

日時	平成19年2月8日(水)15時30分～17時30分
場所	附属図書館会議室
出席者	外部評価委員 吉村賢治 福岡大学総合情報処理センター長 佐賀大学 只木総合情報基盤センター長, 渡邊総合情報基盤センター副センター長, 竹生総合情報基盤センター副センター長, 日永田助教授, 大谷講師, 原総務部長
陪席者	上村総務課長, 宮崎情報企画室長, 松尾情報システム係長, 浅岡利用サービス系(電子情報)係長, 小野技術専門職員, 山田情報管理係長

- 1 開会挨拶(只木総合情報基盤センター長)

- 2 佐賀大学総合情報基盤センター概況報告(竹生総合情報基盤センター副センター長)
- 3 質疑応答
  - 3.1 看護職員へのユーザ ID 付与の状況及び病院内の端末設置状況
  - 3.2 CIO の設置状況
  - 3.3 「研究支援」の内容
  - 3.4 特定の研究テーマに対するシステムの支援
  - 3.5 センター教員のリテラシー教育への関与
  - 3.6 「情報基盤整備の基本方針」を策定する組織
  - 3.7 仕様策定委員会及び技術審査委員会の構成
  - 3.8 サブネットの管理と障害対応
  - 3.9 ソフトウェア導入に関する方針
  - 3.10 学生が演習室等の端末を自由に使用できる時間帯が少ない
  - 3.11 講義室等の情報コンセント設置状況
  - 3.12 学生の PC 購入の推奨状況
  - 3.13 事務系システムとセンターシステムとの係わり
  - 3.14 Windows Vista 及び IE7 の検証の状況と利用者への対応
  - 3.15 情報セキュリティ関連規程の整備状況
  - 3.16 事務システムを担当する職員の異動
- 4 外部評価委員講評
  - 4.1 少ないスタッフでの業務、研究への対応の評価
  - 4.2 学生数に対して、自習できる教室、台数が少ない
  - 4.3 サーバー室が今後の業務の増加等を考慮すると、狭隘
- 5 閉会挨拶

## 評価内容

外部委員には、それぞれ外部評価報告をお願いしたが、ここでは質疑応答も含めて、主な評価・指摘項目の概要を述べる。

- 総合情報基盤センターが、教育研究用システムだけでなく、図書館、電子図書館、事務情報、教務情報までカバーするシステムの維持にあたるとともに、評価データベースなどにも業務を拡大していることについて、評価とともに改善意見があった。システムの統合化及び管理の集中によって、運用体制の改善及び効率化が図られていると評価された。一方、期待されている業務に対して、人的・予算的資源が十分でないとの指摘があった。また、それは大学法人として考えるべき問題と指摘があった。
- 限られた人的・予算的資源の下で業務を円滑に行うために、業務の見直しの必要性

が指摘された。それに基づいて、役割分担の検討が必要であるとの指摘を受けた。

- 大学全構成員へのID付与と統一的認証提供、ディスクレスによる演習用端末の安定運用、佐賀大学が開発した利用者持ち込みPCの認証システムなど、システム・サービスについて、高い評価を得た。一方で、高等学校での情報リテラシ教育の充実や情報リテラシの重要性から、学生数に対して演習用端末が不足であり、授業や自習への懸念が指摘された。
- 上述のように、教育研究だけでなく大学業務関連サーバをホストマシン室に集約している一方で、そのホストマシン室の環境が不十分であるとの指摘を受けた。物理的スペース、電源、空調、入退室管理などに改善が必要である。また、安定運用及び障害時の復旧のための、アウトソーシングや人的手当を検討すべきと指摘があった。
- 運営委員会、運用委員会、仕様策定委員会、技術審査委員会など、組織運営について、評価を受けた。また、総合情報基盤センター、総務部総務課情報企画室、附属図書館利用サービス系(電子情報)係との連携体制についても評価を得た。
- センター教員の教育・研究活動についても、高い評価を得た。特に、センター業務と関連した研究開発課題について評価を得た。

## まとめ

まず、外部評価を実施してくださった委員の皆さんに感謝いたします。短い時間でしたが、私たち総合情報基盤センターの活動内容を理解頂き、適切な評価を頂くことができました。資料作成や会場準備などで協力頂いたスタッフの皆さんにも感謝いたします。

外部評価の結果は、概ね良好であったと認識しています。一方で、重要な指摘事項があったことも真摯に受け止めなければなりません。特に、評価で問題点や改善点として指摘された事項に対して、十分な改善策が講じられて来ていないことは問題です。人的・予算的制約はありますが、課題を認識して、計画的な改善活動が必要と考えます。業務の見直し、教育用端末数の不足解消、ホストマシン室の環境改善などはすぐに始めなければならない課題です。

# 外部評価報告書

平成19年1月31日

株式会社 佐賀 I D C

代表取締役 浅川達夫

今回の外部評価報告書は、私の業務に基き「民間のデータセンター」及び「センター業務の運用管理」の観点から報告いたします。したがって、教育・研究の観点からの報告は省略いたします。

## 1 佐賀大学総合情報基盤センターについての基本認識

学内・国内・国外における大学の研究・教育・事務、及び地域連携等に必須の名称通りの「総合情報基盤」と捉えました。今後の大学運営の戦略的な設備環境資源としての認識が必要と考えます。しかし、業務の内容の可視化が難しい「舞台裏の業務」であり、重要性が理解されにくい状況にあると感じました。

## 2 前回外部評価報告書での指摘事項に対する取組結果

4年前の状況とは大きく外部環境が変化しており、センターにおける取り扱い業務やその範囲、技術の進展等々、その役割が質・量ともに非常に大きくなっています。残念ながら4年前に指摘された基本的な対応すべき事項が改善されず、より大きくなっていると推測しました。

## 3 現状の課題

### 1) 組織としてのセンター確立

大学の置かれた状況を踏まえて、実現できる範囲での取組しかできないのは当然ですが、上記の基本認識を達成するには、大学内の自立した組織として確立させ、且つ、その使命と目的を達成できる経営資源（人、設備、予算、責任、権限、、、）が与えられることが最初になされるべきことと考えます。

### 2) 所管業務の見直し

佐賀大学総合情報基盤センターの設立目的としての「7業務と3調査研究開発」、及び、その業務内容としての、研究支援・教育支援・ネットワーク支援・（電子）図書館支援・DB構築運営・ネットワーク安全管理・SCS支援・学内情報化支援・地域情報化支援等を考えると、熊本・大分・岡山の各大学の外部評価委員の方々からの意見にあるように、少数のスタッフでこれだけの業務をよくもカバーされていると、その献身的な対応に驚きます。

前述の「可視化が難しい舞台裏の業務」を想定し、「大学運営の戦略的な設備環境資源」という期待を継続して達成するには、まず最初に「業務の見直し」が必要と考えます。限られたスタッフ・予算で責任をもって業務を遂行するには、BPR的な手法を活用して、必要な業務の選定と継続実施できる方法を確立し、教員・職員・学生という、大学がもつ経営資源を総動員して、その具体化を実行すべきと強く感じます。

つまり、センタースタッフは企画・研究を中心に、ルーチンワークの運用は職員の方に移管し、時間外は学生へのアウトソーシングという基本的な業務分散が行なえないものかと考えます。

＜改善活動＞ 全教職員及び佐賀大学生全員の基本認識の周知と理解と協力  
利用者アンケートによる満足度調査（ユーザー評価による一般的課題の把握）  
抽出利用者へのヒアリング調査（重要度・優先事項・実態に即した対応）  
技術進展に伴う機器・システム・ネットワーク・ツール等の更新  
運用環境（スペース・電源・空調・防災・配線）の改善

## 4 センター運営について

### 1) 必要な知識とスキル習得

研究業績一覧／国際会議／国際協力事業／協議会・研究会参加における多彩な活動を実施されており、センター運営における知識やスキルについては継続した習得状況と判断します。

### 2) コンピュータ・ネットワーク設備・ソフトウェア・ミドルウェア整備の実施状況

センター教職員の日常的な運用と技術調査検討で、予算内での取り組みは、適時に実施されていると推測します。

## 5 勧告事項

サーバー室等の運用環境については、事故防止・セキュリティの観点から改善すべき事項が見受けられました。

- 1) サーバールックの転倒防止
  - 2) 事故防止のための配線（電源ケーブル・LANケーブル）の整理収納
  - 3) 安定稼動のための電源供給・空調設備の必要容量計測とその対応
  - 4) セキュリティ確保のための「サーバー保護＝目隠しラック」
  - 5) 入退室管理及びその機械的設備の設置
  - 6) 想定される災害・リスクに対応した運用設備環境の点検と必要な対応措置
- つまり、セキュリティポリシーの策定とその実施となります。

最後に、佐賀大学総合情報基盤センターのスタッフの方の献身的なご努力に敬意を表すと同時に、大学の戦略的基盤として整備され、継続した活動の基で、その使命が達成されることを期待いたします。

# 外部評価報告書

平成19年2月27日  
熊本大学総合情報基盤センター  
センター長 宇佐川毅

## 1 はじめに

2007年1月31日開催の佐賀大学総合情報基盤センター外部評価委員会に参加し、同センターの概要について説明をうけるとともに、同センターを見学させていただく機会をいただきました。本報告書は、委員会での説明およびその後の質疑・見学を通じ、外部評価委員として、気づいた点等を報告させていただくものです。

## 2 概要

佐賀大学総合情報基盤センター（以下、センター）は、全体としては非常に良好な状態で運営されていると考えます。

大学統合に伴う2センターの統合の際、システム更新の時期を戦略的に統一されたことや、運用面においても教育環境のみならずメールを含めたネットワーク環境や実習環境を含めネットワーク全体をスムーズに統合されていることは、非常に大きな成果であると理解されます。

また、情報セキュリティおよびネットワーク管理を一元化した opengate システムは、センターが開発から運営を行っておられ、他の大学の範となる取り組みとして、特筆に値するものと考えます。

一方、センターの担うべき業務の増加に伴い、センターの組織としての”余裕”がなくなっていることも、質疑を通じて見て取れました。このような視点に立ち、いくつかの点を課題として報告させていただきます。

## 3 課題

センターの改組に伴い、従来の業務に加え、新たに評価向けデータベース分野及び事務業務支援分野が加わっています。

従来の業務も、求められる質的・量的水準がここ数年間急速に拡大している状況にあり、それに加えての業務の拡大であると理解されるもので、人的・財政的な支援は不可欠であると考えられます。

業務内容の区分としては、センターがいわゆる”箱”を提供し、その中身（コンテンツ）は担当の部局が管理運営するという区分けがなされており、この区分け自体は十分に機能するものと考えられます。

しかし、”箱”の運営においても、すでに施行済みの個人情報保護法や総務省の取りまとめたセキュリティポリシーへの対応等を考えると、運営のための人的・財政的資源は、以前に比べ格段に増加しております。

仮に人的資源の配分が難しい場合でも、アウトソーシングや非常勤職員の雇用等を含めた財政的資源配分は必要不可欠であると考えます。

この点は、センターとしての課題ではなく、大学全体の経営戦略とも密接に関連する課題であると考えます。センターの担うべき業務の多様性と重要性を危機管理の観点も加えて考えると、今後も継続的な全学による支援は不可欠である点を今まで以上に積極的アピールし、必要な資源の適切な配分について継続的な配慮を大学に求める必要があると考えます。

次に、情報リテラシー教育については、全学向け共通コンテンツの提供などセンターとして対応可能な点については、すでに十分な対応がなされておりますが、高等学校における教科「情報」との連携や、大学生として求められる情報リテラシーレベルの変化等を考えますと、少なくとも学生用実習室がセンター内の設備のみに限定されている点は、改善に向けた検討が必要な時期にあると考えます。

実習用教室に一定以上の空き時間を確保することは、講義2時間あたり、予習・復習として単位取得に要求される各2時間の自学自習を行うための環境を提供する上でも、必要であると考えます。

今後教養教育を実施している部局等での演習機能を有する講義室の確保は、次期リプレイス等の適切な時期に、全学的視点からしかるべき全学委員会等で検討すべきではないかと考えます。

また、学生の利用機会の確保の上からは、図書館へ配置されている実習機器（PC）の配置数の増加なども、次期リプレイスの時期に検討してもよいのではないかと考えます。

上記いずれの点も、センター単独では実現の難しい問題ではありますが、大学運営という立場からの議論が進むよう、センターとしての積極的なアピールがあるように考えます。

## 4 まとめ

現在のセンターの運営は良好な状態に保たれており、複数のキャンパスを連携しての全学的に統一されたネットワーク環境の運営や、独自のセキュリティシステム等、他の範になる多くの取り組みがなされています。

しかし、大学におけるセンターの担うべき業務の多様化と量的増加への対応、そして大学を組織するもっとも重要なメンバーである学生に対する情報リテラシー教育等に関しては、今後の展開を視野にいれての取り組みを、これまで同様に継続的に行っていただきたいと考えます。

# 外部評価報告書

平成19年2月28日  
大分大学総合情報処理センター長  
センター長 宇津宮 孝一

平成19年1月31日に、貴センターの外部評価をさせていただいた結果について、外部評価委員として気づいた点を、下記のとおりご報告します。

## 記

以下、自己点検評価報告書の順序に従い、委員会での説明や意見交換・質疑応答及び施設の視察を踏まえてコメントしていく。

## 1 自己点検・評価体制について

平成14年度に外部評価を実施し、4年ごとの実施年に当たる今回、毎年度行っている自己点検評価報告書に基づいて外部評価を実施されたことは、点検評価体制がきちんとなっていることを証明するものとして高く評価できる。ただ、どこかに公開していたのかも知れないが、前回の外部評価での指摘事項がどのように解決されたのかが明確になっておれば、なおよかったと思われる。

## 2 設置の理念と目標及び業務内容

### (1) 理念と目標

平成18年2月に大学の教育研究及び事務の情報システムを統括するために、総合情報基盤センターに改組し、規則で業務を明確に定めて取り組んでいる。そして、「センターは箱を用意し、中身はそれぞれの部署が作り込み、全体のシステムを運用する」という基本理念は、大変明確である。この点を明確にしておかないと、さまざまな業務がセンターに振られて、破綻してしまうことになる。

また、箱にそぐわないものを押しつけられても困るので、部局が個別に作成するシステムについても、センターの理念・目標が浸透し、全学的に連携できるようなシステムにする仕組みが、今後は必要であり、その仕組みが機能することが重要であると思われる。

### (2) 業務内容

研究支援、教育支援、ネットワーク支援、図書館情報支援・電子図書館システム、大学データベース構築・運営、ネットワーク安全管理、SCS支援、学内情報化支援及び地域情報化支援など多彩な業務内容をカバーし、業務として取り組んでいるセンターは、他に例がほとんどないのではないかと大変驚いている。

限られた予算と人員のなかでは、業務におのずから優先順位があるものと思われる。業務の優先順位と将来は学内のどの部署がすべきかも勘案しながら業務を遂行していかないと、センター自身で抱え込み過ぎることにならないのか懸念される。

### 3 情報基盤の整備と運用

これまでばらばらに導入していたシステムを学術情報基盤システムとして、大学で一括して更新した点は、重複投資の回避や共通基盤化を図る点で大変評価できる。また、全構成員の利用者IDを提供し、認証環境も整備されている点は、他センターに比べて相当進んでいる。更新の時期がずれたので止むを得ないが、旧医科大の情報システムをセンターが掲げる理念・目標のもとに早急に統合し、一体的に運用することが望まれる。

### 4 基盤センターのシステム

教育システムは、国内では早くからシンクライアントを取り入れて、上手に運用しているという印象をもった。利用中の学生に聞いたところでは、満足しているが、ときどきフリーズするとも言っているので、受認の限度内かどうか多少気になるところである。センターでは、「利用者心得」なるガイドラインをパンフレットとして配布し、セキュリティ意識の向上に努めていることは、大変評価できる。

ネットワークについては、無線LANの環境を整備し、センター自ら開発した Opengate により持込みPCの接続と認証に早くから取り組んでいることについては、その先見性と教職員の高い技術力の賜物であると感じている。また、学内外の諸施設がきちんとネットワーク化されている。ただ、基幹ネットワークの耐用年限が近い将来くるので、そのあたりをどうするのか、また学外への高速回線の手当を今後どうしていくのかなど課題もある。

### 5 センター建物・設備

視察により、センターの建物が以前に比べて相当狭隘になったように見える。ブレードサーバ類の密集による電源容量や空調容量不足は、不測の事態を招きかねないので、早期な対策が必要である。

### 6 教育活動

センター教員の教育活動については、十分にやっていると判断される。情報教育の現場体験及び情報工学の最新技術の調査研究等を通じて、センターの運営・サービスに反映させるためには、教養教育及び専門教育の授業担当は可能なかぎり継続してほしい。

### 7 研究活動

教授から助手に至るまで、研究活動を活発にやられていると大変評価できる。特に、研究成果を Opengate や統合認証システムとして、時代を先取りして実際の運用に取り入れている点は高く評価できる。また、情報系センター所管研究会における運用・実証研究等の活動も活発である。

### 8 教員配置・事務機構等

#### (1) 教員配置

センターに配置されている教員については、質においても人数においても他センターと比較して、大変充実している。また、関連学部と人事交流を図り、連携していることもよい点であり、評価できる。センター教員人事が、センター運営の理解がされている運営委

員会でやられている点は、センター業務を優先せざるを得ない教員の評価がともすれば低くなるなかで、優れたシステムである。

センター長を専任教員が務めているのは、他センターではほとんど例がなく、センター業務を統括する点で大変望ましい。センター長は学内の情報政策委員会の委員でもあるので、大学全体の動きも把握でき、問題はないように思われるが、一巡後、その功罪を整理されれば他センターの参考になる。

助手については、助教への移行がどうなるのか不明であるが、センター業務の重要性を考えてしかるべき対応が必要だと思われる。

## (2) 事務機構

改組に伴う業務拡大に対応するために、事務機構は相応に整備されてきている。また、技術職員にもさまざまな機会を通じて、自己研鑽や技術向上の場を与える点は大変評価できる。センターの業務を通じて、情報力をもった職員が増加していくことを期待したい。

## 9 国際交流・社会との連携

国際交流については、サービス部門であるセンターとしては十分な実績がある。

社会との連携については、地域との活動を活発にやられている点及び情報系センターにおいて重要な役割を果たしてきている点は大変評価できる。

## 10 組織の活動

さまざまな委員会を定期的で開催し、その結果をセンター運用や利用者サービスに反映しており、大変評価できる。また、センター広報創刊号は質的、量的にも充実している。

以上、総合的に判断して、佐賀大学総合情報基盤センターは、大学の方針のもとセンター職員の努力により、大変よく組織され、運営されていると評価できる。学内の情報化業務は際限なく広がる可能性があるため、全学的な方針のもとに、大学構成員の情報力向上を支援し、役割分担と業務の棲み分けをしながら、組織としての持続性が保たれるように努めていただきたい。

# 外部評価報告書

平成19年2月28日

岡山大学総合情報基盤センター

教授 山井 成良

1月31日に開催された外部評価委員会では、平成18年度自己点検評価報告書（以下、報告書）などの資料が十分に準備されており、また質疑応答や施設見学の時間も十分に取っておられ、外部評価委員として参加した私にとっても非常に意義深い会議でした。今回の会議開催にあたっては事前準備に大変な労力を要したものと推察いたしますが、まずはその点に敬意を表するとともに、委員として招請いただきましたことを感謝します。

以下では、委員会での質疑応答あるいは施設見学で感じた点、並びにその後に資料を改めて拝見して感じた点につきまして述べます。

## 1 総合情報基盤センターの業務について

報告書の2.2節に示されているように、センターの業務は広範囲に及び、またそれぞれの業務もかなりの労力を必要とするものと思われます。それにもかかわらず、うまく業務をこなしているのは、次に示す要因によるものと思われます。

### 1. 教員及び技術系職員の配置

現在の専任スタッフは教員4名、技術系（正規）職員4名であり、他の同規模の国立大学と比較すると充実していると思われます。また、それぞれの方のスキルも十分高いだけでなく、教員が開発・導入を担当して技術系職員が管理・運用を担当するなど連携も十分行われているように拝察しました。

### 2. 管理・運用コストの省力化

教育用システムにおけるシンクライアントの導入、モバイルPC認証システム Opengate におけるディスクレスでの管理運用手法の開発など、管理・運用コストの省力化を目指した工夫が随所に見られます。

### 3. 経費面での工夫

電子計算機システム借料がシーリングの対象外となっているなど、経費面でもセンターの業務が円滑に実行できるように工夫されていることが窺い知れます。

一方、強いて業務上の問題点を挙げるとすれば、本庄メインセンターにおける演習室及びPC台数の不足でしょうか。無線LAN装置がキャンパス内に多数設置されているため、これを用いて個人所有PCをネットワークに接続することは可能ですが、PCを所有していない学生がネットワークにアクセスするには教育用システムを使うしかなく、殆ど空き時間がない現状では困難と思われます。

## 2 総合情報基盤センターにおける教育・研究活動について

まず、教育活動に関しては、全員が学部・大学院の講義（研究指導などを含む）を担当し、さらに利用者講習も頻繁に実施しており、十分活動されていると感じました。ところ

で、報告書の中には公開講座は含まれていないようですが、担当する必要はないのでしょうか。多くの国立大学では情報系センター主催でリテラシー教育を目的とした公開講座を開講しておりますので、念のために付け加えます。

研究活動については、十分な研究時間を確保できないと思われるにもかかわらず、多数の研究業績を挙げておられると感じました。教員の方々は当然ですが、技術系職員の方々も多数の研究業績があるのは特筆すべきだと思います。但し、研究分野が多岐にわたり、研究業績に対する評価は一般に分野ごとに異なりますので、発表件数のみで評価するのは妥当ではないかも知れません。

### 3 総合情報基盤センターにおける組織運営について

まず、センター専任教授がセンター長を併任されている点は特筆すべきです。もともと多忙な専任教授がさらにセンター長の仕事をこなす必要が生じますので、専任教授の負担がますます増加してしまう反面、センター長がセンターの業務を熟知していますので、業務の円滑化には大いに貢献できると思われまます。

次に、運営委員会とは別に、センターの日常的な運用に関する議論を行う運用委員会を設置している点も評価できます。これにより運用委員会の開催頻度が比較的高くなり、いろいろな施策の速やかな実施が可能になっているのではないのでしょうか。

最後に、他部局との連携に関しては、特に附属図書館や総務部情報企画室との連携がうまく機能しているように見受けられました。単に附属図書館や事務組織の業務を一方的に負担するのではなく、これらの部局のスタッフをセンターとの併任とすることで、業務の円滑化が図られていると思われまます。

### 4 まとめ

外部評価委員を担当して、佐賀大学総合情報基盤センターが非常に高いレベルで様々な業務をこなしていることを改めて確認することができました。同じ情報系センターの教員として、私にとっても役立つ点が多かったと思います。ただ、専任教員の人事交流については、報告書の第7章でその重要性に言及されていますが、現実にはなかなか難しいように感じました。これは外部組織がセンターの業務を正當に評価せず、その代わりに研究業績の質の評価に重点を置いているからかも知れません。また、技術系職員の人事交流については報告書では特に触れられておりませんが、4名も職員がおられれば他部局あるいは他大学との人事交流は可能で、これにより各個人あるいは交流先を含めた組織全体の能力向上に繋がると考えられますので、一度検討されてはいかがでしょうか。

貴センターの今後のますますのご発展を期待しております。

# 外部評価報告書

2007年2月9日

福岡大学総合情報処理センター長

吉村賢治

最初に、総合情報基盤センターとして外部評価を実施されていることを高く評価したいと思います。多忙な業務の中での自己点検評価報告書の作成、外部評価委員会の準備等、そのご努力に感心致しました。以下に、自己点検評価報告書及び外部評価委員会で説明頂きました総合情報基盤センターの状況報告、質疑応答、センター施設の見学等を通して感じましたことをまとめて報告します。

## 1 自己点検・評価について

佐賀大学総合情報基盤センターでは、毎年度に自己点検書を作成され、4年毎に外部評価を実施されています。総合情報基盤センターとして、このような自己点検・評価を実施されていること自体が高く評価できると思います。自己点検の作業は、日常の多忙な業務の中での作業になることが推察されますが、今後も継続的に実施されることを期待しています。

## 2 総合情報基盤センターの役割について

近年、情報システムは、大学にとっても事務業務の効率化を図り、学生サービスを向上するために不可欠な要素となり、平成18年に改組された佐賀大学総合情報基盤センターの設置目的の一つにも、「佐賀大学の共通の情報基盤の整備推進」が挙げられており、業務の中にも「事務情報化の推進及び支援等に関すること」が含まれています。総合情報基盤センター長が最高情報化統括責任者（CIO）の補佐として位置付けられていることから、総合情報基盤センターは佐賀大学全体の情報化推進にとって中心的役割を担う組織であることが分かりました。外部評価委員会での質疑応答から、全学的な情報基盤整備をはじめ、大学の情報化を円滑に進めるために必要な情報政策委員会の設置や情報セキュリティポリシーの作成・維持管理なども含め、総合情報基盤センターは全学的な情報化の中心的な役割を十分に果たされていることが確認できました。

## 3 情報基盤の整備と運用について

早くからディスクレスPCの有用性に着目され、日本でも早い時期に教育用PCにディスクレスPCを採用されたことや統合認証システムOpengateをセンターで独自に開発されて運用されていることを知り、感心致しました。限られた人的資源で効率良く、安定したセンターの運用を行う努力をされていることが確認できました。

## 4 総合情報基盤センターにおける研究活動について

全学的な情報基盤の整備やシステムの管理・運用、連携する学科、大学院の教育や全学的な情報処理教育など多忙な総合情報基盤センターの職務にもかかわらず、センター所属の教員の皆さんが継続的に研究成果を挙げていらっしゃることを知り、感心致しました。

大変なことだと思いますが、この状態を維持していかれることを期待しています。

## 5 総合情報基盤センターの施設について

施設の規模を説明して頂き、見学もさせて頂きましたが、今後、e-learning の普及等も含め、学内の情報化が推進されることを考えますと、約7,400名の学生に対して現状のパソコン演習室の数、パソコンの台数では不足してくることが懸念されます。また、今後の情報化の進展を考えますとサーバやネットワーク機器を設置されているマシン室の面積も不足してくることが容易に推測できます。大学運営がますます厳しくなっていく現状で、施設を拡充することは一朝一夕に行えることではありませんが、計画的に対策を立てられる必要があると感じました。

図書館業務の支援や電子図書館機能の充実、大学データベースの構築等、他にも評価すべきことは沢山あるのですが、以上、特に強く感じたことだけを中心にまとめました。今回、外部評価委員として総合情報基盤センターの活動を詳しく見ることができましたが、(旧)佐賀大学と(旧)佐賀医科大学との統合という大きな組織の変化に対応する作業があつたにもかかわらず、継続的に安定したサービスの提供と研究活動を行われてこられた総合情報基盤センターの皆様のご努力には敬服致します。今後の益々のご発展を期待しています。